このスポット・おすすめ!

居心地抜群の空間で味わう
島野菜たっぷりの創作料理

海岸食堂CAPRICE カプリース

ランチメニューは3種類 海&夕日の眺めも格別

まだご存じではない方のために。読谷村の西海岸に面した「Gala青い海」が、グルメや体験が楽しめるレジャースポットとして、より魅力的に生まれ変わっています。

昨年8月にオープンした「海岸食堂カプリース」は、本格イタリアンから沖縄料理まで、旬の島野菜を生かした創作料理がバラエティー豊かに味わえるお店。お酒&ドリンク専門の真栄田直さんが店主を務め、奥さまがデザイン、弟さんが料理を担当。ファミリー3人で力を合わせ、異国情緒あふれる居心地のいい空間をつくり出しています。

お酒と相性ピッタリの一品料理をそろえたディナーも魅力的ですが、まずは気軽に味試ししたい人にはランチがオススメ。カレー・パスタ・ローストビーフ丼というなじみ深いメニューだからこそ、丁寧に手間ひまかけた格別なおいしさを実感できるはず。どの料理にも島野菜がたっぷりと使われており、心と体がうれしい悲鳴を上げ始めます。

「店内での飲食にまだ抵抗がある方は、屋外のテント席をご利用いただけますし、芝生広場が隣接しているので、小さなお子さまづれも大歓迎ですよ」と真栄田さん。目の前に海が広がるロケーションは開放感にあふれ、一帯が茜色に染まるサンセットタイムは至福の時。村内を熟知した人であっても「地元の良さを再認識してもらえるのでは」と話しています。

住所：読谷村高志保915(Gala 青い海内)
電話：098-800-1398
営業：11:30～21:00(L.O.20:00)
※金・土曜日は～22:00(L.O.21:00)
休み：火・水曜日
駐車：70台(共用)
https://www.caprice-okinawa.com

●ランチメニュー
A：カレー(サラダ付き)……900円
B：パスタ(サラダ・スープ・パン付き)…1200円
C：ローストビーフ丼(限定5食)……950円

●ディナー
生ハム盛り合わせ……1100円
採れたて温野菜……880円
エビのアヒージョ(バケット付き)…900円
明太クリームパスタ……1200円

なぞなぞに読者答えて プレゼント

このスポット・おすすめコーナーで紹介の『海岸食堂カプリース』で使える

2,000円分 お食事券 3名様

Qなぞなぞ
1本だと食べにくく、2本だと食べやすいものは何?

ヒント
食事をするとき、最初に持つもの。

9月号当選者 前号の答え〈マスカット〉

おめでとうございます!
★神山園美さん(読谷村在住)
★比嘉幸雄さん(那覇市在住)
★与久田めぐみさん(読谷村在住)

ワイワイ広場

読者プレゼント応募方法

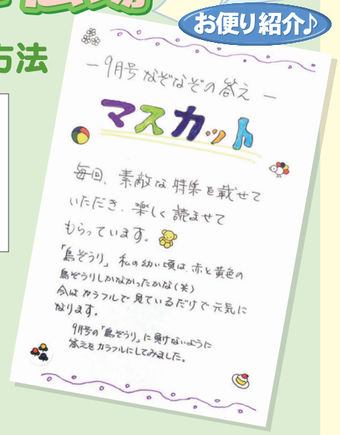
宛先
切手 はがき 904-0303
読谷村字伊良皆237-1
ウインズ
『広報誌係』
①住所 ②氏名
③年齢 ④職業
⑤電話番号

裏
⑥なぞなぞの答え
⑦ご意見・ご感想

応募者の中から抽選で、読者プレゼントを進呈致します。どしどしご応募下さい!

締め切り
2020年10月20日消印有効
「当選者は次号(Vol.194)にて発表致します」

『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)



Check
ウインズのHP・スタッフブログ

(株)池原建設 企画事業部ウインズ
〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆237-1
営業時間 / 9:00～18:00(年末年始を除く)

住宅のメンテナンスや補修等のご相談は、お気軽にスタッフへお声掛け下さい!

0120-229-512 ウインズ 池原建設 検索

読谷村想い合ち手作りマスク1000人プロジェクト

読谷村在住の中村喜美枝さん親子から、300枚の手作りマスクの寄贈を受けたことを機にスタートしたプロジェクト。有志の皆さんから届いた手作り・市販マスクを、読谷村内で必要とする方や施設へ提供します。

受付先・読谷村役場1階 福祉課 tel. 098-982-9209

今年の10月はスポーツの日(旧・体育の日)が7月に移動した関係で、ノー祝日月間に。それでも10月1日の「中秋の名月」をはじめ、伝統行事やイベントが複数予定されています。10月24日・25日の読谷まつりは「村内すべてがまつり会場」をコンセプトに、主会場を設けない新しいスタイルで開催されます。

～スマイルビジョン～
Smile vision!

唯一無二の色味と風格。「アカギ」を世界に誇る銘木へ。木工作家の屋宜政廣さんが語る沖縄の木の魅力と可能性

■屋宜政廣さんは1956年読谷村渡具知生まれ。 工房名の島変木は、「偏屈な人」を意味する「唐変木」をもじった造語で、そこには「曲線の多い沖縄の木だからこそつくれる作品を」との思いが込められています

「工房 島変木（とうへんぼく）」主宰の屋宜政廣さんは、この道32年になる熟練の木工作家です。リュウキュウマツ、クロキ、イジュ、センダン等々、県産木を使った家具やインテリア小物を幅広く手がけ、なかでも沖縄在来種である「アカギ」を用いた作品を多数制作。沖縄ウッディフェア、沖縄市工芸フェアなどの開催にも携わり、沖縄の木が秘める魅力と可能性を発信し続けています。

個性豊かな県産材でつくる肌触りの良い優しい家具

屋宜さんがつくる家具の特徴は、全体的に丸みがあって温かみが感じられること。素材となる木の形状や性質を見極めながら、一点ずつ手作業で制作しており、工業製品とは趣の違った深い味わいがにじんでいます。

「肌触りは特に意識しますね。丸みがあると手で触れたときの優しさが増し、無意識のうちにずっとなでたりつかんだりしていたくなる。それが毎日繰り返されればどんどん触り心地が滑らかになるので、いっそう使う人の生活になじんできます」。

■「世界の銘木は亜熱帯地域に多い。沖縄は良質な木の宝庫」と話す屋宜さん

■沖縄市知花にある工房兼ギャラリー。アカギ、センダン、クスノキなど県産材でつくった個性豊かな家具がずらり。 見学時は事前予約がおすすめです。

丸みを帯びた造形は、90％以上の作品が県産材でつくられていることとも密接に関係しています。よく知られるように沖縄で育った木は、台風など強風の影響により、幹や枝が曲がったりねじれたりしているものがほとんど。屋宜さんはこれを一つの地域性と捉え、曲線美を巧みに生かした個性豊かなデザインに昇華させています。

「県内最大の木材の産地であるやんばるには、“木ぬまがいむんや使ーりーしが、人ぬまがいむんやちかーらん”（木の曲がったものは使い道があって価値があるが、曲がった人間はどうしようもない）という格言が残っています。家具づくりを通じて木材の地産地消につながれば」。

屋宜さんが木工作家の道を志したのは30代前半。もともと手仕事が得意だった上に「どうしようもなく木が好きになって」脱サラを決意し、沖縄県工芸振興センターで基礎技術を習得。以後は創作活動に没入し、1991年に現在の工房を沖縄市知花に設立しました。

今でも初心に変わりなく、「何があっても木に触れていると心が落ち着きます。夫婦げんかをしても木に触れると穏やかな気持ちになります（笑）」と笑顔。木に備わるそんな癒やし効果について、屋宜さんは「自然界で最も人間に近い存在だからかもしれない」と分析しています。

■「作品には作り手の人柄やその時の心情が表れる」からこそ、制作中は楽しく真剣に。要望に応じて、木でできるものは何でも制作します

アカギは沖縄が誇る在来種 伊勢神宮の神宝にも奉納

沖縄で生育するさまざまな樹種の中で、屋宜さんが好んで使用しているのが在来種の「アカギ」の木。名前の通り、生育中の幹も伐採後の材の色も赤みのある褐色をしており、家具や小物、工芸など幅広い用途に使われています。

「世界の銘木といえばウォールナット、チーク、マホガニーですが、共通しているのは材に“赤み”があること。内地で人気が高いケヤキも、高級なものは赤い色味が特徴です。そして足元を見れば、沖縄にはアカギがあるのだから、その価値をもっと多くの人に知ってもらいたいんです」。

木材図鑑などの資料を見ると、アカギ材は弱点として「ひび割れしやすい」ことがよく指摘されています。しかし長年の研究と試行錯誤により、「水に2年間漬けておけば、乾燥させるとき割れにくくなる」と解決済み。今や県内の同業者や専門家の間では、「アカギのことを聞きたいなら島変木へ」という暗黙の了解が生まれるほどになりました。

驚いたのは、今から3年ほど前、伊勢神宮の宮司を名乗る人物から突如電話がかかってきました。「次の式年遷宮にあたり、奉納する太刀の鞘に使うアカギの木を探している」と言われ、後日来沖したご一行を案内。伊勢神宮では1300年以上の昔から、20年ごとの式年遷宮のたびに、神宝の一つ「須我流横刀」にアカギを使用しており、今回は昭和初期に備蓄していた材料が底を突いたため、巡り巡って屋宜さんのもとへ話が舞い込んできました。

「良質な材料を目利きして、かなり大量に仕入れていかれたので、向こう100年は在庫の心配はないでしょうね」。

つまり次回以降の式年遷宮でも、屋宜さんがお墨付きを与えた県産のアカギ材が、繰り返し奉納されることになります。

■街路樹や公園樹で見かけることも多いアカギの木。製材はご覧の通り、木目は目立たず色ムラも少なく、年月を経るごとに赤みが増していきます

業界全体の底上げを目指し「ウッディフェア」などを開催

県内では現在、約80の工房や作家、事業所が県産材を扱い、活動しています。その大多数が一堂に会するのが「沖縄ウッディフェア」、「沖縄市工芸フェア」といったイベントであり、屋宜さんも作家個人として出展する傍ら、主催者の一員として立ち上げから関わってきました。

「沖縄の木工業界の底上げを図り、県産材の普及につなげることが一番の目的です。お客様にとっては、あちこちの工房へ足を運ぶ必要がなく、出展者の作品を一箇所で見比べながら、好みの家具や小物選びが楽しめる絶好の機会ですからね」。

今年は新型ウイルスの影響により、どちらのイベントも見合わせることになりましたが、来年こそは今年の分までパワーアップして、無事に開催されることが望まれます。

屋宜さん個人の創作活動に目を移せば、2021年は工房「島変木」設立32年目の節目にあたります。丸みのある優しい作風は変わらぬまま、木と向き合う姿勢に年々余裕が生まれ、「若い頃は創作のたびに木と格闘していた気がするけれど、最近は素材と遊んでいる感覚で楽しめています」とのこと。一方でアカギの価値向上に向けた取り組みは、生涯を通じた「ライフワーク」と位置付け、「今は伐採後にただ焼却処分されているアカギも多いので、水中乾燥できるプールの拡充を図り、伐採・利用・植栽のサイクルを確立していきたい。材木としての価値が認められれば木工を志す若者も増え、業界全体の発展につながるはず。私の役目はその土台づくりですね」と将来を見据えています。

■昨年11月に豊見城市の沖縄空手会館で開かれた第24回沖縄ウッディフェアの様子。全40組の出展者が一堂に会しました